

大宇宙の大中心たる命（みこと）の命（みこと）のり）の遡邇遡邇なれば、往くも還るもアアヒガテンジンユウアイコウ（南無阿弥陀佛）と称へ奉らば、此の土此のままの高天原にして、此の身このままの示にして尊にして天皇にてましますなり。

言靈の幸と云ふことは昔から教へられて居るが、私の知つて居る人に九十三歳の長壽で高天原に歸られた婦人が居つたが、夫れを高天原に往生したとは何うして知れたかと申しますに、其の人は最早此の世界にお暇をする時が近づいたと申して、飲食物も極めて淡泊な物にして言靈のみを唱へて居りますと、次第次第に其の手の色が美しくなつて来るので、看護の人々が不思議がつて話し合ひながら一緒に言靈を唱へて居たところが、次第次第に美しくなつた手が透き徹つて来て、まるで水晶の玉を見る様になつたまま言靈奉称の聲と共に高天原に歸られたのであります。

既に聲の絶えた後までも其のまま玉の如な美しさは変らなかつたので、其れが高天原往生の證左なのであります。此の世界を去る時でなくとも言靈奉称の功を積みめば此の身此のまま白玉身となるので其の暁を神の人と讃美するのである。神の人とは尊であつて、日本歴史に傳へたる瓊瓊杵尊・火火出見尊・天鈿女尊とは皆、此の神の人で、大宇宙の大中心としての解脱（さと）り）の中に在られたのである。

大正人道教主人

多田山公自秘稿

大正人道教主人とは直日にし
て、國家にありては國主なり國
土なり國君なりにてましますな
れば、家庭に於ける戸主なるべ
く、組合に於ては組合長にして
實社にありては社長なり、會長
なりにして、世界人類としては
神祖なり、基督なり、天照大御
神なり、天帝なりにてまします
なり。

其の故は、生死遷流しつつ生
死遷流を知らざるが故にして、
天命なり、美國止（みこと）なれ
ばにして大宇大宙のその相（す
かた）なり、その事理なるなり。

然れども、人の身は體として
限られたる世界に生活するが
故に、其の身の来由を知らず、
は路を辨ぜずして、體體に執着
し、見聞し得る範圍に於て目的
標準を定めんとするなり。

於此か、所謂、偶像を目標と

せざれば確實感を得難くして、
人爲の對照體を求めて初めて安
心立命を得たりとなすなり。
佛像佛画の本尊と稱し、神像
神體と稱するものと共に、天皇
と稱するも亦然るなり。
大正人道教主人とは神直日な
り。
而して、靈にして、魂にして
三にして、二にして、一にして
日にして、月にして、日月にし

て、四象にして、兩儀にして、
大極にして、無極にして、極無
極にして、如是なり。

メにして、ヒにして、フにし
て、ヒメにして、ヒコにして、
ハルヒヒメにして、ハルヒにして
十種にして、三種にして、一二
三四五六七八九十百千萬にして
零なり。

之れを人天萬類の基準となす
なり。

否、基準なりと知るなり。
ヒフミヨイムナヤコノタリ
ヤモモチチミテリ。
アアヒガテンジンユウアイコ
ウ。

今日今時人不死
風塵埃塵空日老不
虛名徒壽公世間
三年不鳴

山多田三先生の筆蹟

「人類世界が存在する。」

此の常識を超越したるトコロを、

「アマノミナカヌシノオホミカミ・アマテラスオホミカミ・オホハラヘドノオホミカミ」と、称へ、之レを徽号で画けば○○◎で、その○は無之トコロの大客観で、アマノミナカヌシノオホミカミ。◎は無之きトコロの主神が万有を発現し整理し救済し、帰結せしむる神徳にして、オホハラヘドノオホミカミ。とは称へまつるなり。（昭和十六年脩禊講演録第百五十一、二頁参照）之レを総括して

アアヒガテンジンユウアイコウと称へまつる。亦の名はヒフミヨイムナヤココノタリヤモモチチミテリと称へ、亦の名は、

アマテラスオホミカミ・アマテラススメオホミカミ・アマテラシマスマスメオホミカミ・オホヒヒルメノチノミコト・オホトヒワケノカミと称へ、（脩禊講演録第二十三頁）その亦の御名また甚多し。

以上 昭和廿九年六月廿日 梅雨中

- ①『此の（人間世界の）常識を超越したるトコロ』とは、無宇宙のことである。
即ち、この神名は、それぞれ、無宇宙の「カミ」の「境地」と、「主体」と、
^{はたらき}「神徳」を表現したものである。
- ②『これ無きトコロ（無宇宙）の大客観』とは、一切の主観を排除した境地の
ことである。即ち、アマノミナカヌシノオホミカミとは、無宇宙の「零の海」
（太平等海）そのものであり、それを何らかの実体としてではなく、「境地」
と捉えた際の神名である。
- ③『◎は、これ無き中に（無宇宙において）その主を仰ぎたるものにして』と
は、この記号は無宇宙の主神を表現したものだ、という意味である。
- ④『これ無きトコロの主神が万有を～せしむる神徳』とは、詰まるところ、無
宇宙の主神たる天照大御神が宇宙の側に及ぼす作用力、という意味である。
^{はたらき}狭義においては、オホハラヘドノオホミカミは、万有を救済し、帰結させる
神徳のことであろうと思われるのだが、ここでは、より広義に解釈し、「万
有を発現し整理し、救済し帰結せしめる神徳」、と表現されている。
おそらく、これは川面流に配慮した表現であり、本来の多田流としては、そ
の意味でならば、アマテラシマシマススメオホミカミ（◎）と表現すべきで
あろう。
- ⑤この『総括』は、「以上の三つの神名をまとめて」といった程度の意味合い
であり、必ずしも、「コトタマとして、十四秘言と等価である」、と言ってい
る訳ではない。
ただ単に、「宇宙の側への作用力まで含めて、無宇宙の側全体」を表現するに
は、こういう言い方もある、と述べているだけである。

十四秘言と「一点之火」

十四秘言は、「神界の完成に努めるコトタマ」であり、その末尾六音は「高天原現出のコトタマ」である。

また、仮に図を描くならば、無宇宙「○」と、宇宙は「⊕」と描くことができる。

この図の^{タテ}経と^{ヨキ}緯は時間と空間であり、その交点は「十字架上一点之火」である。(未来252頁他)

その一点は、「主体」としては、「時空を超えた（無宇宙の）実在」であり、また「活用」としては、宇宙の側に作用して「時空」を現す。

即ち、この一点は、「無宇宙」と「宇宙」を繋ぐ経路であり、「^{ミツガキ}瑞垣」であり、人間はこの一点を感得することによって初めて無宇宙(^{カミヨ}神界)に参入することができる。

十四秘言によって「神界の完成に努める」ということは、裏を返せば、^{みづから}自身が「神界に参入した意識を持つ」ということでもある。

そして、そのためには、「十字架上一点之火」を感得する必要がある。

その状況を図解するならば、おおよそ次頁の図のようになるだろう。

図1：一個の円で 無宇宙と宇宙（全宇宙）を表現する場合
 （「^{アマツチ}天^{ツクリ}地^{カミ}概略図」を参照）

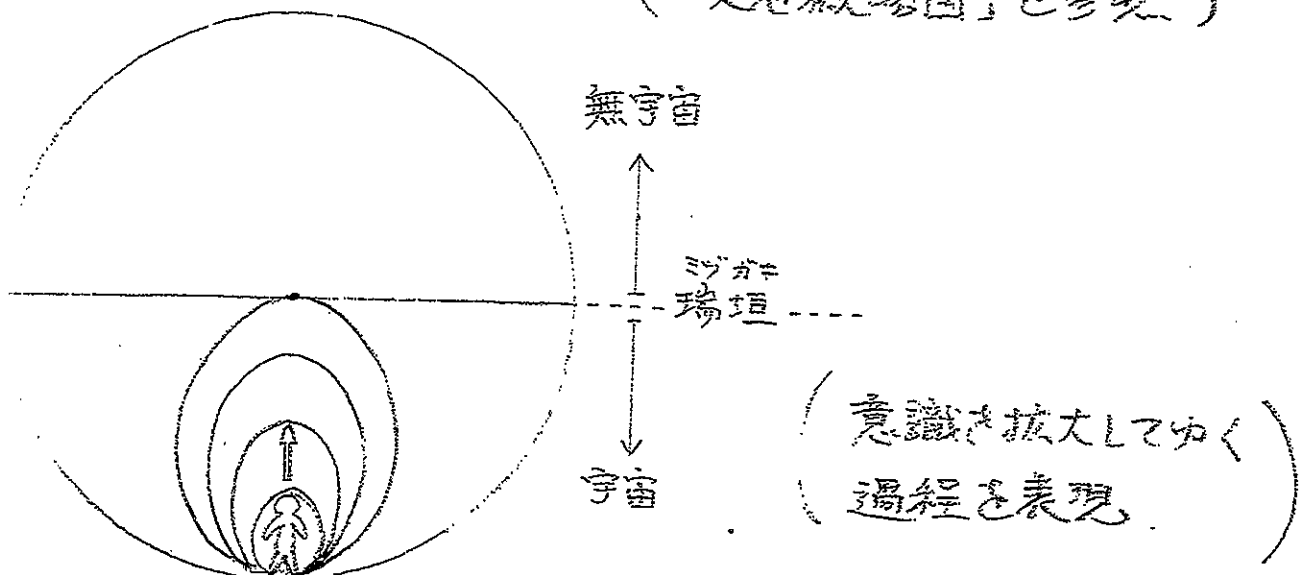
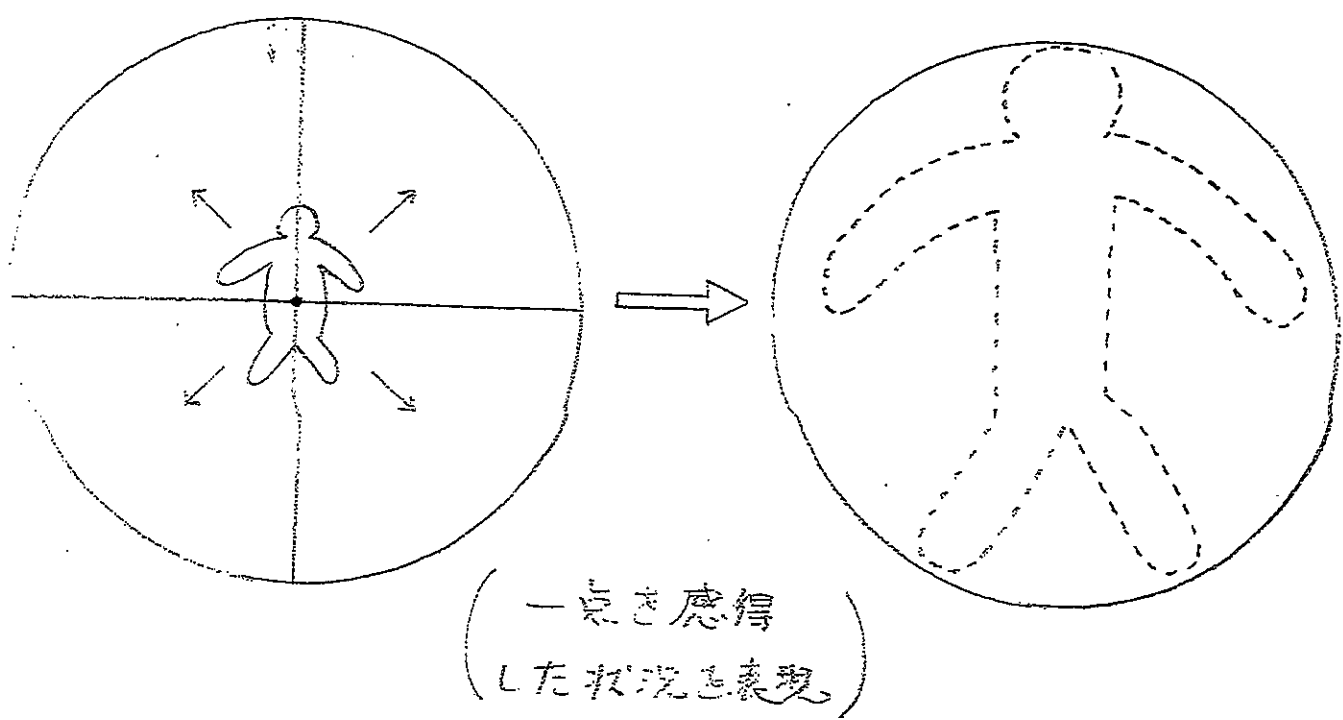
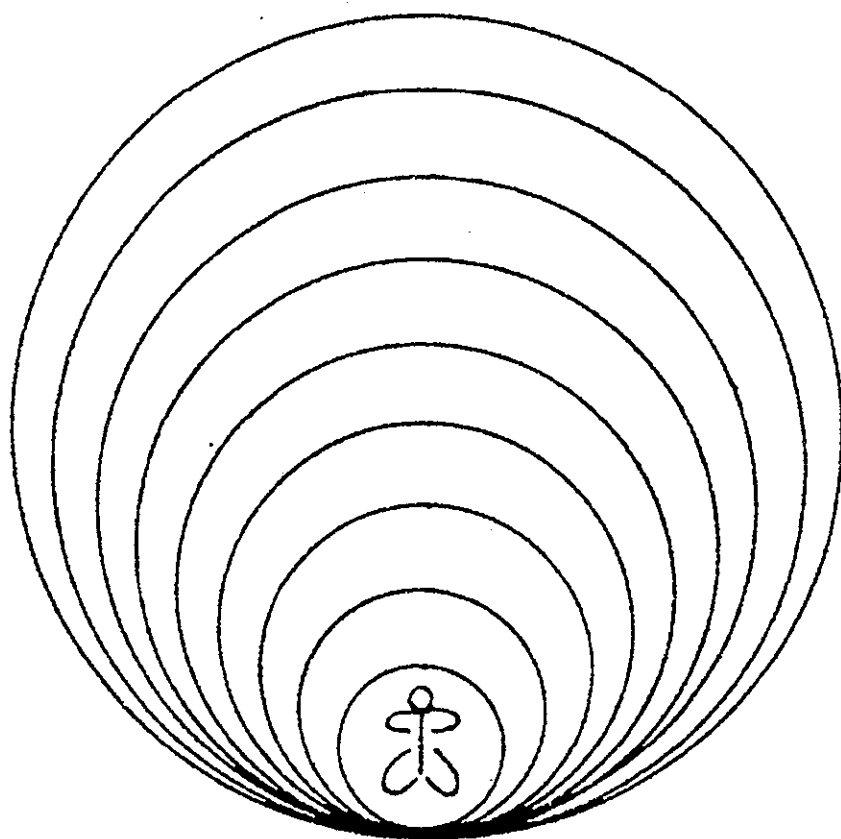


図2：宇宙と無宇宙とをそれぞれ別の円で表現する場合

^{タテマキ}宇宙（経緯あり）

無宇宙（^{タテ}経も^{マキ}緯もなし）





九天の図

質界の中に複合的に存在する。すなわち、次元の異なる形で複合していることが明らかになった。だから、「澄明なるものは昇り、濁れるものは沈む」という思考が発生し、清明なる神は「上下する」ということにされたのではあるまいか。

なるほど、「澄明なる靈魂」は軽く、あたかも空中に浮揚して移行しているように見えるので、横水平の世界に移行していつても、天に昇っているかに見えたのであろう。

そこで、山蔭家の古文書に描かれている図を略式化して紹介すると左図のようになる。

これを「九天の図」と呼ぶが、一人の人物にすべての輪が集中していることに注意してほしい。

まずこの図は、異なる次元の世界が九層あ

輪王の神事

多くの労力を消費し、多くの資料を破壊し、多くの材料を集め、多くの時間を経、空間を占據して、家が出来、國が成り立つ。

出来上ったと思ふのは、唯、その造る人の目的に到達したと、その人が思ふまでのことで、事實は、必しも何うだかわからぬ。出来たと思つた時には、既に壊れつつあるのが實際なのだから、唯、僅に、人が眺めて、人間的に定着したと思ふまでのことである。

明治の畫人橋本雅邦翁が東山時代の絵を指して、それ等の作品が描かれてから四百年。天地の間に在って微妙なる変化を生じ、漸く今に到って完成されたものだと言はれたそうだ。まことにその通りで、その畫人の遺品に、天地の神彩が加はりつつ、長き歳月を経て、翁の賞讃に値するものと完成されたと言ふも、また甚白い。

天地万有一切合切、無間断に流行転換しつつ窮まるることが無い。これが、日本民族の「無窮觀」である。ところが、古典を読み誤つたものが、自分勝手に解釋して、「何處何處までも常位不変なのが天壤無窮」だと云ふ。ひどく狭くしたもの、窮屈に萎縮したものだ。と云ふばかりでなく、それでは宇宙の事實でなく真理でない。

事理に戻るものばかりノサバツテ、大道を塞いで居る。

是のやうなのを整理して、神界を現成するを、「輪王之神事」と称へて、天若比古の天返矢であり、高木神の天返矢である。

「天返矢」を「アママト」と呼ぶ。

それは、「極大極小の火」なりとの義で、猶太風に云へば「エホバ」である。

日本の古典は、之れを物語に伝へて、天祖の神業を明にしてある。唯、それが、物語史だから、読者の多くが、その事理を把握し得ない。

真經句かろ右

正誠正義神國築成
の意味となる。

まとめ

陰の半面

太極(全体)

陽の半面

ミノカミ
日神

アメノミナカヌシノカミ
天ニ御中主神

タカミムスビノカミ
高皇產靈神

カムミムスビノカミ
神皇產靈神

カミムスヒ、ミヤノミコト
神產巢日御祖命
(作り給おす神徳)
即、產土神
ウケスナノカミ

オホナホドノカミ
大直靈神

タカミムスヒ、タカキノカミ
高御產巢日高本神
(殺し奪う神徳)
即、鎮守神
ミマモリノカミ

ヨコ
緯の活動としては
滋潤 ミヅ

神輪 カミワ
輪君 ワギミ

タテ
経の活動としては
綾威 ミヅ

ワギミノカミワザ
「輪君ニ神事」
(神界築成のための破壊の神事)

i) 放つ側から言えば
「高本神の天返矢」
タカキノカミ アマノカヘシヤ

ii) 受ける側としては
「天若日子の天返矢」
アメワカヒコ アメノカヘリヤ

出典

弓

矢

受ける者

言霊の幸

アマノハジユミ
天ノ波士弓

アマノカウヤ
天ノ加久矢

アマノカヒコ
天若日子

古事記 (後)

アマノハジユミ
天ノ波士弓

アマノカウヤ
天ノ加久矢

アマノカヒコ
天若日子

(先)

アマノマカゴユミ
天ノ麻迦古弓

アマノハハヤ
天ノ波々矢

旧事本紀

アマノカゴユミ
天ノ鹿見弓

アマノハハヤ
天ノ羽々矢

アマノカヒコ
天稚彦

日本書記

アマノカゴユミ
天鹿見弓

アマノハハヤ
天羽々矢

アマノカヒコ
天稚彦

如斯く、神産巢日御祖命は、作り活す神である。作り活かす爲には、種種の材料が必要なので、其の材料を得るのは、破壊である。神産巢日之命の作り活す神徳に對して、殺し奪ふ破壊の神徳を司らるるのは、高木神にてします。古事記には、「葦原中國を平定する爲に遣はされた天若日子が、八年にもなるのに復奏さぬ。鳴が使者となつて、それを詰問した。天佐具賣が、其の聲を聞き、天若日子に、此の鳥の鳴音が、ひどく悪いか、射殺されたが可いでせうとお進めまをすと、天若日子は、天神から賜はられた天之波士弓天之加久矢を持ち、天神の使者を射殺された。其の矢が、鳴女の胸を通り、逆に射上げて、天安河の河原に坐す天照大御神・高神の御所に遠んだ。是の高木神とは、高御産巢日神の別名である。其の高木神が、天若日子の射放たれた矢をると、先に、天若日子に賜ひて、中國を平定せよと命せられたもので、矢の羽には、血が著いて居た。それ、諸神等に示せて詔せらるるには、或も、命せの如く、天若日子が、惡神を射た矢であるならば、天若子には中るな。或亦、心邪く、惡事を爲たのであるならば、天若日子は、此の矢に麻賀禮矣と、神言をへ、其の矢を取り、其の矢の穴から、衝返し下した。すると、天若日子の寢て居る高胸の坂に中りて、天若日は、死はてられた」と記して、高木神の神徳を明瞭させてある。「弓矢は高木神の作られたのだ」と、舊記にるのは、此の神が、妖魔を調伏し、濟度し、救出して、神と化す破壊の大魔神であることを傳へたので、大直神の半面の神徳である。其の他の半面の神徳は、則、神産巢日神なので、高御産巢日神と神産巢日神との神徳を合せては、大直靈神と稱へまつりて、八神の別名にほかならぬのである。八柱の神の別名であつて、二柱の別名にてましますのである。

魂、幽靈の詞を用ゐねばならず、鳥獸、虫魚、草木、山川、風雨、雲雷の類を導くには、亦、鳥獸、虫魚、草木、山川、風雨、雲雷、等の詞を用ゐねばならぬのである。日本書紀には、「高皇產靈尊が、多くの神に勅して詔ふには、葦原中國は、^{アシハラナカクニ}巖石、樹木、草葉の類までも、擾がしく言ひ争ふので、夜は^{ホベ}煤煙のやうで、晝は^{サバヘ}蒼蠅のやうにうるさい」と記し、延喜式の祝詞には、「騒いて居た巖石草木をも、言ひ争ふことを止めさせて」と載せてある。それと共に、日本書紀、古事記、舊事紀、風土記、等には、多くの^{マガゴト}魔言が記され、^{マガワザ}魔行が載せられてある。それは、單に記載されてあると云ふのみではなく、之を教へられてあるので、「赤海^{アカ}鯽魚^ヒの喉から、^{ツリバリ}鈎を探り出して、之を^{スマ}清洗し、^{ホヲリノミコト}火遠理命に奉る時。綿津見大神が、誨へて云はるるには、此の鈎は、^{オボチ}淤煩鈎、^{ススデ}須須鈎、^{マデチ}貧鈎、^{ウルデ}宇流鈎、と云ひて、後手に、其の兄に賜ひませ。さうして、其の兄が、^{アゲタ}高田を作るならば、^{ナガミコト}汝命は、^{クボタ}下田を營り、^{イロセ}其の兄が、^{クボタ}下田を作るならば、^{ナガミコト}汝命は、^{アゲタ}高田を營り給へ。然らば、吾は、水を掌るにより、三年の間に、必、其の兄は、^{イロセ}貧窮になるであらう」と、古事記の傳へたのは、^{マガゴト}魔言と^{マガワザ}魔行とを、^{ホヲリノミコト}火遠理命が、^{ワタツミノカミ}綿津見大神から教へられたので、「^{ツフサ}備に、^{ワタノカミ}海神の教言の如くにして、其の鈎を與へたまひき」と記し、其の兄は、^{イロセ}遂に、「^{ノチ}今より以後、^{ナガミコト}汝命の晝夜守護人と爲りて、^{オトミコト}弟命に哀憐を乞ふに到つたのである。之は、一例として擧げたまでであるが、^{コトタマ}言靈の神威を傳へて、^{カウラギノヒトコトスシノカミ}最嚴烈な記事は、^{カウ}雄略天皇が、^{ラギスシノカミ}葛城山に行幸なされた時に、^ア葛城主神が、「吾は、^{マガゴト}惡事も一言、^{ヒトコト}善事も一言、^{コトサカ}言離の神、^{カミ}葛城之一言主之大神である」と、^{ヒメカミワザ}名告りたまひて、^ウ宇都志意美を現された事である。之を、前に擧げた「や」の^{ヒメカミワザ}祕事となすので、「^{スサノヲノミコト}須佐能男命が、^{ナリカブラ}鳴鏑を大野の中に射入れて、^{アシハラシコジ}葦原色許男に、その矢を^ヤ探らしめ、其の野を^ヤ焼き廻らしたる時、^ヒ火の中を踏みて、^ヤ求め得たる矢」なので、「^{タカキノカミ}高木神が、^{アメワカヒコ}天若日子に與へて、^{アシハラノナカクニ}葦原中國を^{コトムケヤハ}言趣和さしめた矢」なので、其の矢は、長さも無く、幅も

無く、唯、位置のみ存るところの、「**點**」である。之を、「**極**」と云ふので、人間身としての計算には上らないけれどもが、總べての基準を示して、一切のものの位置を得せしむるので、古事記の卷頭に、「**天地と初發けたる時、高天原に成りませる神は、天之御中主神と白したまふ**」とあるところで、**神名としては、「あめのみなかなめしのかみ」**であるが、其の**神德を顯しては、高木神にてましますから、隱身にてましますさぬのである。即、宇都志意美のましますので、産靈産魂たる玉緒である。その玉緒の結ばれぬのを「零」と呼ぶので、無始無終で、無際無涯で、無朕無象で、無形無聲で、無である。無であるところの「零」。之を基準とするが故に、萬類萬物は、相容れて悖ることなく、相互に爭奪するを要せぬのである。**

此處に、人天萬類の安心立命が存り、相互幸福の大道が存り、晃耀赫灼たる神光を仰ぎまつるのである。あなかしこ。清み澄みて明み切りたるは、「**神**」にてましますなり。人皆は、**神の代の神言靈を稱へ奉りつつ、人を率ゐ、世を導きて、共に與に、神國築成の大業を成就すべきである。**

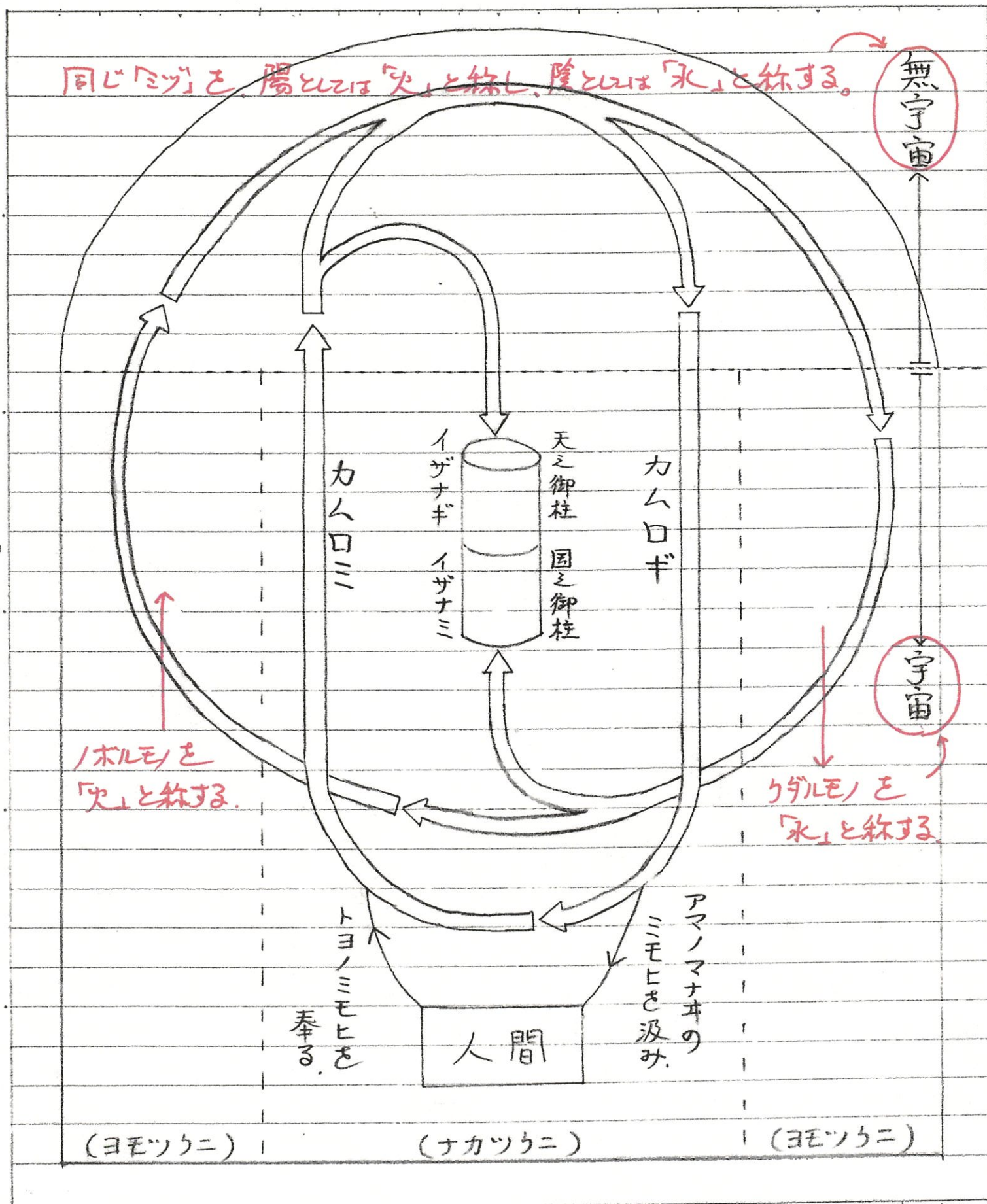
以上 第二章 完

第三章 生死遷流

『生死遷流』

之から本文である。書名は「**死生觀**」であるが、其の死生の悟證を得べき我は、今現に生きて居る。生きて居ると認識して居る。故に、**先、生から説き起すのである。**

ミイツ 循環図

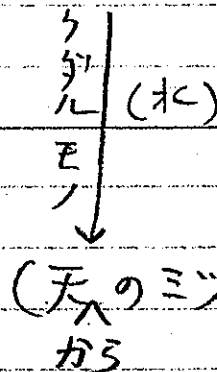
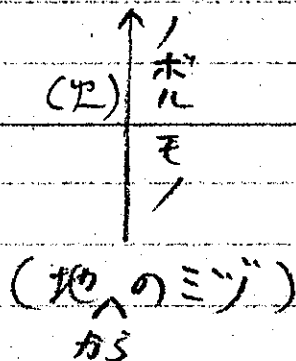
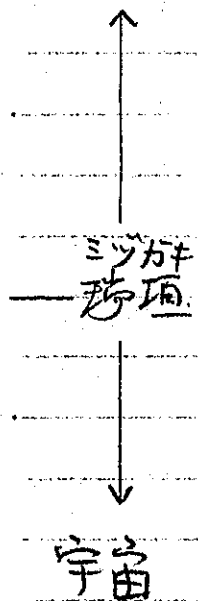


(幸.136)

ミンスビノカミ

次に三産霊神

無宇宙

ミヅ 経路としては綾威
緯ヨとして水

 あくまで
旧約聖書用語

ミヅ はコトマ であり 霊的な実体の名称だが、
ここで言う「火」や「水」はただの呼称である。

ノボルモノ …… 「本質的に昇り続けるモノ」という意味ではなく

循環するミヅの上昇局面を指して

「今は上昇しているところのミヅ」の意味。

ウダルモノ …… 上記と同様

筒之男命・上津綿津見神・上筒之男命。天照大御神・月讀命・建速須佐之男命。十四柱神は、生れさせ給ふ。その生れさせ給ふとは、伊邪那岐大御神の「御身之禊」オホミミノハラヘであつて、神國樂園の築き成された曉である。その十四柱神と稱へまつるは、そのまま、伊邪那岐大御神と稱へまつる三柱の貴子にてましますなれば、天津日子日子番能邇邇藝尊と仰ぎまつる天皇にてあらせらるるのである。

アナカシコ
畏矣。

「仰ぎて見れば、天津日は、二つはあらず。人の世の、大天皇は、一柱」とは、スメラミコト竺紫日向之橘小門之阿波岐原の禊の約言だと云ふことが出來よう。

天津日は二つはあらず。根本中心たる直日は、唯一不二である。唯一であるから、重重無盡又無量である。此のままに、無量無限であるから、各自各自が各自各自に、其の所有せる根本直日を明め得ない。全人類統率の大天皇を拜みまつることを知らない。まことに憐むべく悲しむべきの極みである。覺めよ。醒めよ。覺醒め來つて、此の火を仰げ。此の日を讀へよ。其處は大平等海にして、一碧瑠璃の光明世界で、平和嘉悦の高天原で、豐葦原の水穗國で、全人類世界此のままの樂園で、天國で、極樂淨土とも呼ぶのである。

第十一の、「天之眞名井」とは、宇氣比と云ふに等しい。

宇氣比とは、「汗氣伏せて、踏み登杼呂許志」たるもので、「汝が心の清明きこと」を知るもので、「天安河を中に置いて、十拳劔を、三段に打折る」ものである。

さうして、「物實を、モノザネ天之眞名井に振滌ぐ」ものは、天安河の禊で、天照大御神の祕事としての、御子生みなる「氣吹の狹霧」である。其の氣吹の狹霧とは、◎と畫きて、水火既濟と支那人の稱する「ミヅホ」で、☵☲と

第88頁 4行目「〜にてあらせらるる」

「全く^{イコール}等価」という意味ではなく

「本質において同じ」ぐらいの意味。

「存在の仕度」は明らかに異なっている。

(上記の「本質」は「中心」としての性質を意味する。)

「大御神」はすべて、実体としては同一の「大宇宙そのもの」。

① 故に イザナギノオホミカミ ≡ アマテラスオホミカミ

② コトアマツカミ としても 一柱と数えれば 天ニ御中主神であり、
三柱 〃 造化大神である。

それと同じように 一柱としては、天照大御神だが、
三柱 〃 三貴子。

③ 三貴子の血をすべて受け継いでいるのが天孫 ≡ キリコト

④ 天皇の又皇たる^{ヤミ}所以は、天孫と^{ニギハ}霊的に一体化すること。

晝くのは、陰陽和合で、地天泰平なので、和魂^{ニギミタマ}たる大平等海裡に、直毘^{ナホビ}としての火を孕めるもので、古言に、「フム」と傳へたところ、「フム」とは、祓禊の義であると共に、その結果でもある。祓言としての「フ」と、「フ」とを重ねて、それを結ぶに、「ム」の音を以つてして一語を成したので、生産の義で、産靈で、産魂で、産靈産魂である。その産靈産魂結び止めたる玉緒を、「ミヅホ」と呼ぶ。

玉の緒を、結び結びて、人の身は、伊着くなるなる、天安河。

「タマノヲ」とは、「五伴緒」で、「八十神」で、「八上比賣」で、神としては、「八神」で、人としては、「八千魂」で、「八十萬魂」で、物としては、分分個個で、天上にては、群星で、地下にては、妖類魔族で、分散しては、邪惡醜陋で、死と呼ばれ、統一しては、善美正誠で、生と云はるるのである。

ところが、人は生を喜び、死を惡む癖が有るので、「タマノヲ」をも、「命^{イノチ}」と呼びて、生けるものとか、生くべきものとかの義に用ゐ來つた。けれども、「タマノヲ」も、「イノチ」も、本來は生死を通じて、千變萬化する靈魂^{クシビ}なりとの義で、「ヒ」を活用の方面から觀て名づけたのである。それで、それがまた直に、燃ゆるものであり、流るるものであり、上るものであり、下るものであり、暖きものであり、冷きものであり、尊きものであり、卑きものであり、天で、地で、陰で、陽で、死で、生で、水火である。それで、「ミヅホ」と呼ぶのである。

「ミヅホ」の「ミヅ」は、水^{ミヅ}で、滋潤^{ミツ}で、稜威^{ミツ}で、瑞祥^{ミツ}であつて、經^{タテ}と緯^{ヌキ}とで、十^トである。その「ホ」とは、火^ホで、穗^ホで、秀^ホで、高く明に顯れたるものである。此の二語を合せたる「ミヅホ」とは、奇靈異變の實體であり、妙用であるとの義で、それをまた、稱詞として「水穗國^{ミツホノクニ}」と用ゐては、萬物備はりて、瑞祥到り、稜威赫灼として、百姓潤澤なるもので、太平嘉悅の神國樂園なりとの義である。

此の神國樂園を築くべく、モノザネ物實たる資料としての一切合切を、天之眞名井に振滌ぐと云ふのは、資料を整理するもので、神としての上では、「八十伴緒を統ぶるもので、五伴緒を率ゐるもので、八十神を打平ぐるもので、八上比賣を得給ふもので、大直日神が、八神の亦の御名にてまします」ので、人としてならば、八千魂を統一するものである。八千魂の統一したる曉には、人の心身ココロミながらの神なので、之を説明的に云へば十で、一二三四五六七八九十であるが、其の實相は、一なる零である。

此の零が、天之眞名井なので、白玉光底に潺湲たるの泉である。古來、之を「本打切り末打斷ちたる天津金木」と傳へたのは、太邇邇の祕言で、極を教へたので、「與天壤無窮者」で、經としての時間を超えて居るから、緯としての空間を忘れて實在するもので、之が、人間世界に傳承したる「カミ」である。

ところが、人間身は、雜糅混淆なために、此の極を窮め得ないで、小我の見地に居て、神界を憶測するから、まるで、トンチンカンな悲劇が演出される。

ウケフネ汗氣船を踏みとどろこし、天宇受賣、かみかかりすも。うつむろにして。

「ウツムロ」と古典に傳へたのは、神吾田鹿葦津比賣の宇氣比で、戸無き室と記して、零界虚空の義なることを教へてある。「虚空中にして御子の生れます」とあるものも、また固より此の零位なので、ミムスビノカミクラ三産靈神座である。

三産靈神座は、零で、極で、一であるから、天之眞名井と稱へて、神代の神の神座である。此こに生れさせ給ふは、別天神で、隱身カクレミにてまします。

ところが、「天照大御神は、建速須佐之男命の物實を執らして、此の天之眞名井に振滌ぎ給ふのであるから、物實を純一不可分の零に擢きて、更に吹き生し給ふの義で、其の吹き成し給ふは、ヌナトモモユラ「奴那登母母由良に振滌ぎて、

佐賀美爾迦美」給ふのである。

「ヌナトモモユラ」とは、「内は富良富良、外は須夫須夫」と云へるもので、「妻須世理毘賣」の教で、箇體成立の神業である。「サガミニカミ」は、噬み咬むので、作り成すものである。之を換言すれば、「ヌナトモモユラ、サガミニカミ」とは、修理固成の義で、天沼矛の神儀尊容で、「二柱神が、淤能碁呂嶋に天降りまして、天之御柱を見立て、八尋殿を見立て、其の妹に、汝が身は如何に成れると問ひ給へば、吾が身は、成り成りて成り合はざるところ一處在りとまをしたまひ、伊邪那岐命の御身は、成り成りて成り餘れる處一處在りと詔りたまひ、成り餘れる處を以て、成り合はざる處に刺し塞ぎて、國土を生み成さん」と、相互に契りて、身と言と意との統一するにあらざれば、神界を築き得ざるものなることを垂示したまへるもので、「成り合はざる處」とは、女で、凹で、陰で、^フと描くので、數としての二であると共に五で、それは緯である。「成り餘れる處」とは、男で、陽で、^ヒと描くので、數としての一であると共に六で、之は經である。

緯なる女とは、滋潤であり、水であつて、罔象女と傳へたる水神である。之を二だとは、成り合はざるが故であり、また之を五だとは、成り成りて子女を産出するの母胎であるからなのである。經なる男とは、稜威で、火で、「迦具土神」で、地界の主神である。そこで、之は、男としての^ヒ一で、母たる二に對しては六である。六と云ふのは「ム」で、結びたるもので、五なる成數より産出せられたる一で、之を六なる一と説明するのである。之が、天地否塞の祕數である上からは、また、零なのである。

それは兎に角として、此の經と、其の緯との相交りたるものが、國土であり、人であり、天神で、地祇で、天地で、泰否で、神魔である。

経緯の別名 幸5 1、9 1頁より

あらゆる「箇体」は、必ず「経」^{タテ}と「緯」^{ヌキ}とから成る。

各々、別名は次のとおりである。

「経」^{タテ}・・男^ヲ（陽・雄・凸）、宇（時間）、「か」（天^{てん}・乾^{けん}）、父、いち

「緯」^{ヌキ}・・女^メ（陰・雌・凹）、宙（空間）、「み」（地^ち・坤^{こん}）、母、に

「大宇宙そのもの」や「零^ヒそのもの」は、「箇体」ではない。

多数の「零^ヒ」が集積して、一定の内部構造を獲得した段階を称して「箇体」と云う。

その構造は、「中心と外郭」という形で捉えることができるが、「経^{タテ}と緯^{ヌキ}」という形で捉えることもできる。

あえて言うならば、後者は「箇体の成立過程」を理解するための考え方であり、前者は「箇体の完成形」を把握するための考え方である。

また、神話では、「経」^{タテ}のことを「成り余れる処」と、「緯」^{ヌキ}のことを「成り合わざる処」と表現している。

その両者が合体して一個の「箇体」が成立^{なり}ることを表現した図象が  である。

其ノ神儀行事ハ古來複雑ナル傳ヘア
ガ如クナリト雖、言トシテハ、

あまてらすおほみかみ・あまてら
すすめおほみかみ・あまてらしま
しますすすめおほみかみ

教ヘラレタルヲ日本民族ノ久シク捧
シ來レルトコロトナス。

ああひがてんじんゆうあいこう

教ヘラレタルモ之ト等シキ神言ナリ。

相トシテハ一圓光明體ニシテ古來○

書キタルヲ最簡明ナリトナス。此ノ

ハ文字トシテ日本・支那・中央亞細

・東部歐羅巴等ニ教ヘ來リタレドモ、

久シクシテ此ノ文ノ原義ヲ知ルモノ

シキニ到リタルハ慨嘆スベキナリ。

高天原の神傳

○ヲ日本民族ハひと讀ミひつきトモ
云ヒひふみトモ呼ビあちめトモ稱シあ
まのみなかぬしのおほみかみたかみむ
すびのかみかむむすびみおやのみこ
とトモ白シ奉レル秘文ナリ。

○ノ○ハ境地ヲ示シテ外廓ヲ教ヘ、
・ハ中心ヲ示シテ本體妙用ノ不一不二
ナルコトヲ知ラシメ、合セテ○トナシ
タルモノハ中心ト外廓トノ位置ヲ知ラ
シムルト共ニ相互ニ干犯スベカラザル
ノ理ト、相離ルベカラズ悖ルベカラズ
乱ルベカラズシテ本來本有ノ光明身
リ光明身ナラザルベカラズ光明身ト
サザルベカラザルモノナルガ、人ト
テ生レ來リシ責務ニシテ究極ノ目的
リトノ義ヲ教ヘラレタルナリ。

大日本建國ノ精神ハ此處ニ存リ。

庭經營ノ根本方針モ自己修養ノ基準

他人教化ノ目標モ共ニ同ジク此處ニ

ルナリ。

ア

秘文のこころ

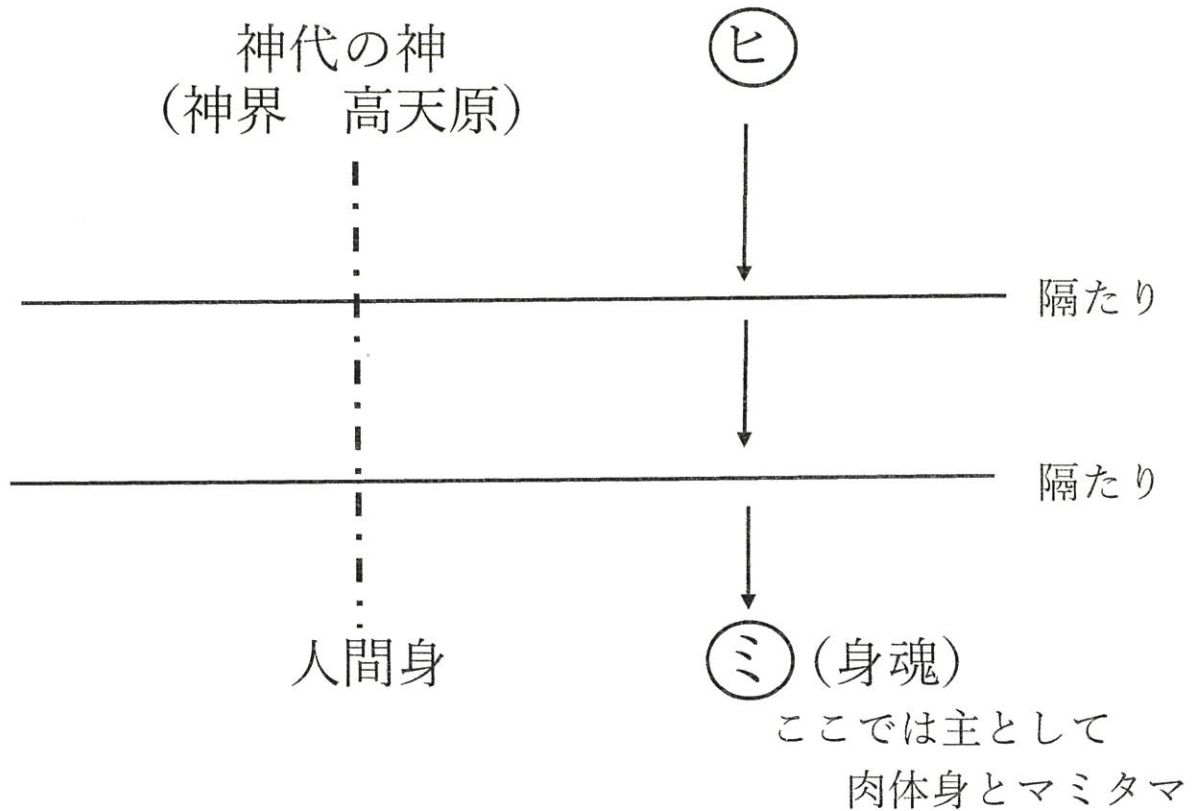
古事記は、その劈頭に、「高御産巢日神・神産巢日神」と稱へてあるが、之は神代の神の御上で、人間身の出生を教へたのではないから、「日」の字を用ゐ、日本紀の「高皇産靈尊・神皇産靈尊」と記して、「靈」の字を用ゐたのと同じやうに、「ヒ」の神の御事と拜するのである。

ひのかみの、かみわざなりて、ながむれば。あめつちは、いまや、みすまる。あめつちは、いまぞ、わかる。はるひひめ、しらすはるのは、かみのはな、いまさかりなり、おほひひるめのひたかみのくに。

その國は「日」の國で、その神は「日」の神で、人間身の未成らざる神界の事理である。さうして、清陽と重濁と、或は、精粗と、厚薄と、様々の異別は有るが、眞理は一貫して變らず、事實は眞理を離れるわけが無いから、人間身も、神代の事理をそのまゝに、「ムスビ」「ムスビ」し「ミ」である。唯、その神界を出でて幾度轉。神代を去ること幾時空。そこに隔りが出來たのである。隔りを我と我が身に築いたのである。

もしも、其の隔つるものを取り去るならば、この身此のまま、神代の神に連るので、生死一貫、顯幽一途。日神の^{ミヅ}光^{ミヒクリ}指し透るのである。その上で拜みまつれば、産土神とは、神産巢日神祖命にてましまし、鎮守神とは、高御産巢日高木神にてまします。

天^{アマ}なるや、天^{アマ}の返し矢、天^{アマサカ}離る、夷女^{ヒナツメ}の子が、神ながら、氷^{ヒメ}目^メ矢^ヤを受けて。神守る。眞賢木立てて。高知るや、天^{アマ}つ國玉。高彈くや、天^{アマ}の詔琴。人の身を、神とはすべく、人皆を、日止と成すべく、大虚空、焚き



隔たりを取り払って考えれば

人間神もまたヒノカミに直結している

(生死一貫 顕幽一途)

逆に言えば日神 (中心) の  のミヒカリが

「今ここ」にさしとおって

「今ここ」もまた高天原の一部であると解るようになる

→そうすれば、産土神が神産巢日神のウツシオミで

鎮守神が高御産巢日神のウツシオミである

と解るようになる

一ニ三四五六七八九十百千萬

2. アアガ
実体

アマテラスオホミカミ
天照大御神

1. アアヒ
焼地

アマテラスオホミカミ
天照皇大御神

3. アアヒガニシ
作用力

アマテラスオホミカミ
天照坐皇大御神

4. シユウアイコウ
人間世界
このフなかり

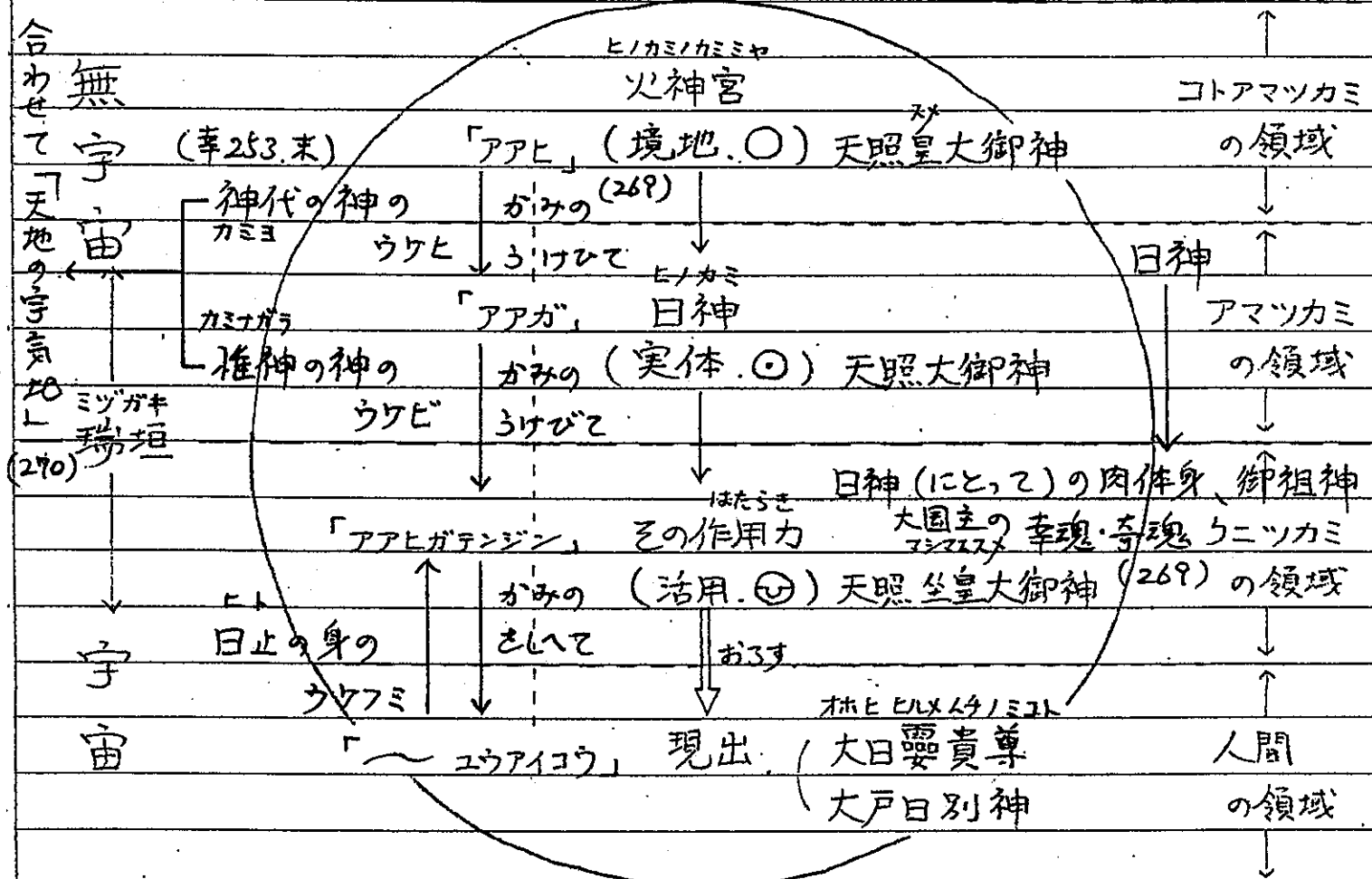
オホトヒワケリカミ
大戸別神

オホヒヒルメムチノミコト
大日靈貴尊

2019.12.17.

十四字秘言と大宇宙概念図

(あくまでも「理解の便宜」としての概念図である。実際には、
日神の作用力は、最初から宇宙の隅々にまで行き渡っている。
ヒノカミ はたさき



178

幸118頁

② 天照大御神 ^{ヒノカミ} (日神)

① ↓

ミタマ
この御田の身魂 (八百萬神) 人間では直日。
高天原のアマツカミ

↓

$\times 100$

モモ

(百八百萬、天津神國津神) 人間の身魂

ナホヒ

② ↓

ミタマ

①の関係性と②の関係性は等価であり、

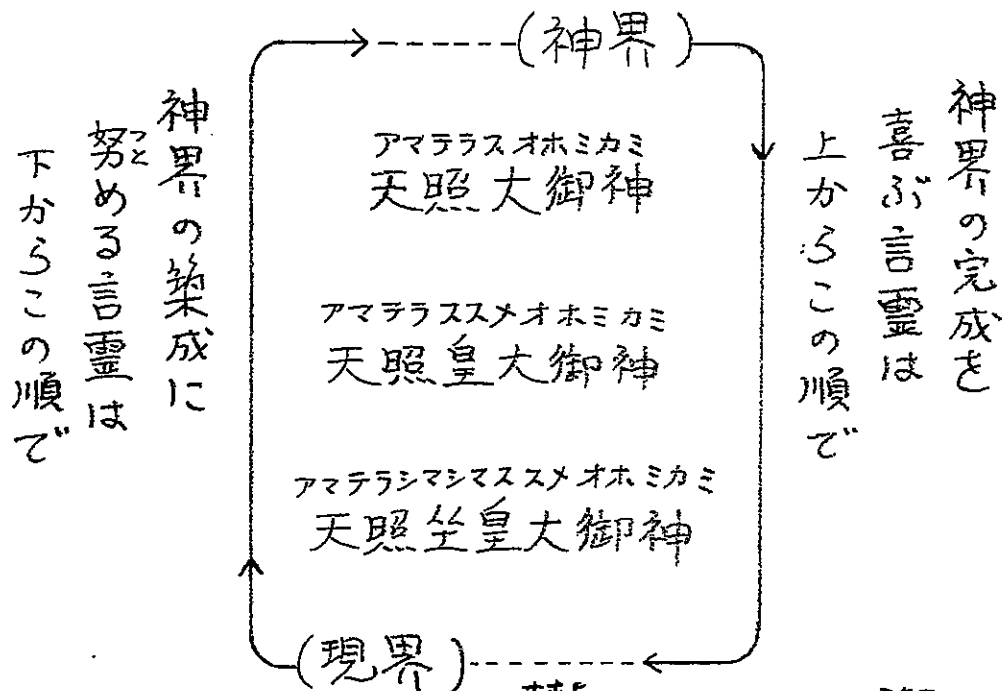
それだからこそ「高天原の八百萬神 (人間では直日)」を

「^{ヒノカミ} 日神の^{ミタマ} 御田の^{ミタマ} 身魂」と表現することができるのである。

⇒これが出来上がって、八百万神 (直日) がこれと役る

段階が①となる。

二種類の言霊の区別とそのイメージ



ナホヒ 直日の力を強め、全身魂ミタマに行き渡らせるコトヲマ。

① 神界の築成に努める言霊 → 禊行事の中で用いる。

1. アアヒガテンジンユウアイコウ (十四字秘言) アアガ ①
2. ヒフミヨイムナヤココノタリヤモモチチミテリ ① ヒト
(ヒフミヨイムナヤコト)
3. 天照坐皇大御神、天照皇大御神、天照大御神 (上述)
② 作甲 〇 境地 ③ 実伴 (人間では直日) ナホヒ

② 神界の完成を喜ぶ言霊 → 各別の行事の中で用いる。

1. アハレアナオモシロアナタノシアナサヤケオケ
幸118頁の① (オホヒルメムチノミコトの神言霊)

2. アスバカスヤゾサカラカスヤゾオオオオオオオオ

3. 天照大御神、天照皇大御神、天照坐皇大御神 (上述)

天神諸命(三)

アハレアナオモシロアナタノ
シアナサヤケオケ。

二十一音一語にして一言なる
天照大御神天照皇大御神天照坐
皇大御神の神言なり。

アハレアナオモシロアナタノ
シアナサヤケオケ。

之れを五言なりと傳へたる
部廣成、大同二年二月十三日、
古語拾遺として綴れるもの、遂
に後人を誤らしめたるは惜むべ
きかぎりなり。

アハレアナオモシロアナタノ
シアナサヤケオケ。

二十一音一語の神言靈なるこ
とは、

アマテラスオホミカミアマテ
ラスオホミカミミアマテラシ
マシマススオホミカミ。

三十八音一語の神言靈なるが
如くなれども、其のアマテラス
オホミカミと称へ、アマテラス
スオホミカミとも、アマテラ
シマススオホミカミとも称へ

まつる神言靈が各別の神言靈な

アナオモシロと云ひ、アナタノ
シとも、アナサヤケオケとも云
へる各別の神言靈も皆、各別に
別義の神言靈なるなり。

(中略)

「アハレアナオモシロアナタノ
シアナサヤケオケ」と称ふるは、
「アヒガテンジンエウアイコウ」
と稱するに似て喜るところあり。

天照坐皇大御神天照皇大御神

天照大御神と稱へまつるが「ア
ヒガテンジンエウアイコウ」と同
義にして、「アハレアナオモシロ
アナタノシアナサヤケオケ」と称
へまつるは天照大御神天照皇大
御神天照坐皇大御神と稱へまつ
ると同義なれば、此の神言靈は
天照大御神出生の曉、諸神が讀
へ仰しまつれるなりと傳へたる
なり。

天照大御神出生の曉、諸神が讀
へ仰しまつれるなりと傳へたる
なり。

神言靈なるなり。

オホミカミメムチノミコトの
神言靈なるなり。

アスバカスヤゾサカラカスヤ
ゾオオオオオオオオと稱へまつ
ると同義なり矣。

以上

昭和十一年八月二十五日

二

神界の築成につとめる言靈

他、「ヒフミヨイムナヤココノトリヤ
モモタチミテリ」など

神界の完成を喜ぶ言靈

(三つの神名を逆の順で唱えると、
別の意味(右記)になってしまう
ので、注意を要する。)

大正人道教主人

多田山公日祿稿

大正人道教主人とは直日にして、國家にありては國主なり、國土なり、國君なりにてましますなれば、家庭に於ける戸主なるべく、組合に於ては組合長にして、會社にありては社長なり、會長なりにして、世界人類としては釋迦なり、基督なり、天照大御伴なり、天帝なりにてましますなり。

其の故は、生死遷流しつつ生死遷流を知らざるが故にして、天命なり、美固止(みこと)なればにして、大宇大宙のその相(すがた)なり、その事理なるなり。

然れども、人の身は體として限られたる世界に生活するが故に、其の身の来由を知らず、往路を辨ぜずして、體に執着し、見聞し得る範圍に於て目的標準を定めんとするなり。

於此か、所謂、偶像を目標と

常を命

せざれば確實感を得難くして、人爲の對照體を求めて初めて安心立命を得たりとなすなり。
佛像佛画の本尊と稱し、神像と稱するものと共に、天皇と稱するも亦然るなり。

大正人道教主人とは神直日なり。
而して、靈にして、魂にして、三にして、二にして、一にして、日にして、月にして、日月にして、

大極にして、無極にして、極無極にして、如是なり。

メにして、ヒにして、フにして、ハルヒヒメにして、ニにして、三、四、五、六、七、八、九、十、百、千、萬にして、零なり。

之れを人天萬類の基準となすなり。

否、「基準なり」と知るなり。
ヒフミヨイムナヤココノタリ
ヤモモチチミテリ。
アアヒガテンジンユウアイコウ。

今日今時人不來
風塵掩望日光不照
虛名徒壽然世間
三年不鳴

山多田雄三先生筆蹟

人天万類の基準が^ヒ零であることと
正しく知るためのコトヲマ。

これを知り、これを基準として、自分の直日を見つけ直すことが、
即ち、直日の強化となり、直日の人となることにつながらるのである。

困厄しては妖魔となる。

汝はあしはらのなかつくににましまして

2019.6.11.

NO.

DATE

「神界の築成に努める言霊」と言う時の神界とは、

「この土このまま高天原」と言う時の高天原のこと。③

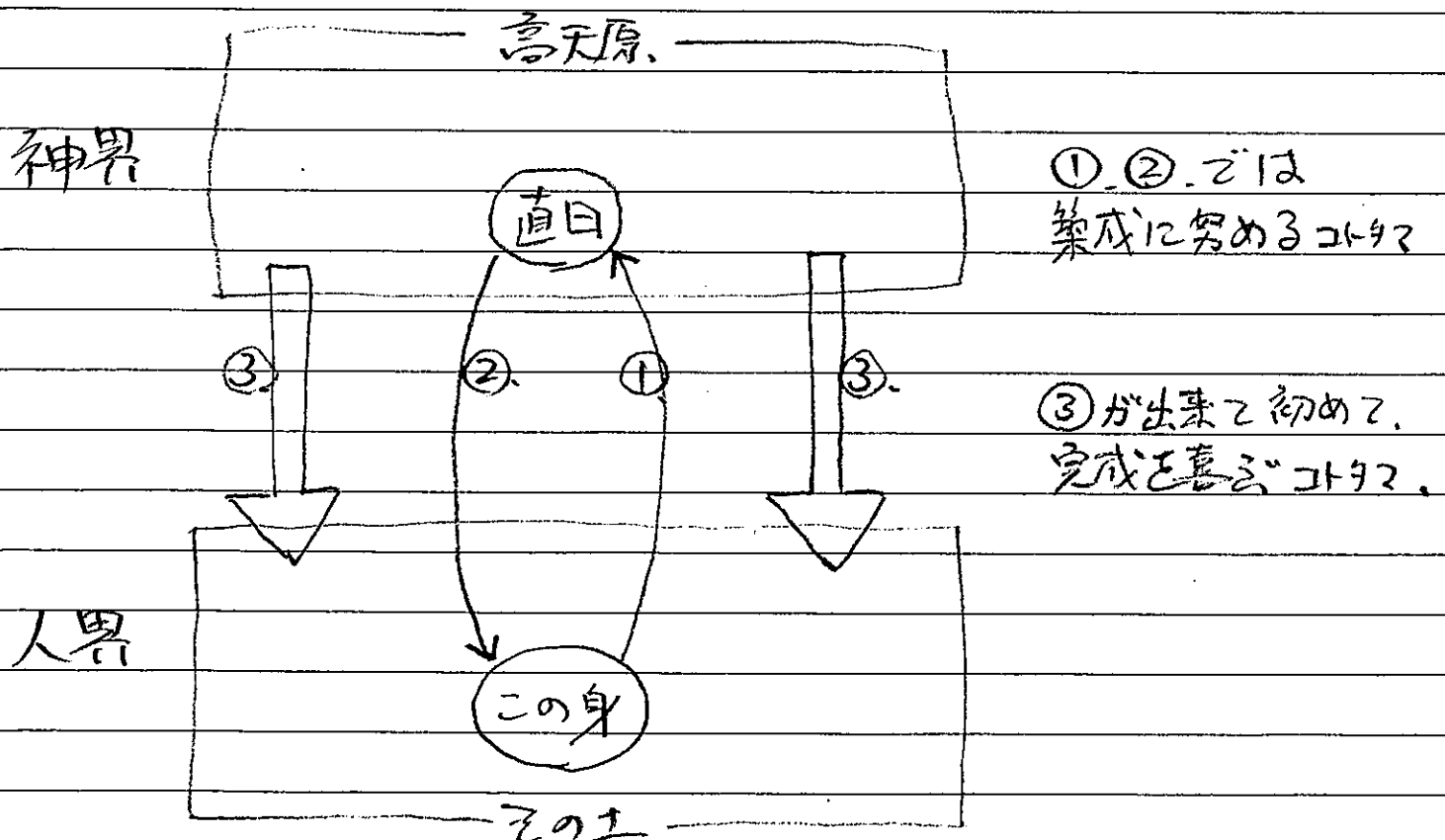
それを実現するためには、まずその高天原の中心として、

自分自身が「この身このまま神と化す」ことが必要である。

即ち、自分の本体が直日であることと正しく理解して、①

その統率力を全身魂にあまねく行なわねらせる②ことで、

「直日の人」となることが必要なのである。



1 アアヒ — 「ア」は大宇宙の義。他の意味ではないことと示す
○

ために、「アア」と重ねた。その「ヒ」なのだから。

「アアヒ」は 大宇宙に遍満する^ヒ零の意味。

2 アアガ — 末巻231頁にも『「ア」の凝りて赫灼と照り輝ける身』
○

とあるとおり、アアヒ○に対する アアガ○である。

3 アアヒガテンジン — (私見ながら、テンジンは^テ照^シり知らずの義か?)
㊦

そうした○でも㊦でもあると23の 実在の

はたき

作用力が抜かってゆくことを意味する。

即ち、境地○、実体㊦に対する作用㊦である。

(三神即一身)

↓
4

アアヒガテンジンユウアイコウ

人としては、自分の直日もまた○であると悟ること。

次に 場としては、それと悟った境地としての高天原と

そのまま人界に降りて来ること。

→ 全部つなげると、十四字秘言の強調文となる。
1-2-3-4。

「拜神瞑目して光を認むるは神命にして、其の位置と数と明と暗と滅と色彩と形状等とは、直に其の説明を與へたまへるものなり。」

①座を回リて多数の一あるを認めたるものは、赫々の火にして聖無動尊の加護顯著なるを示し、②高く一点の火を拜するものは、光明世界に住することを

教へ、③日ならざる一箇の火は八握劍にして、④全身零に坐する時は白玉身を悟證し得たる曉なり。

アアヒガテンジンユウアイコウとは稱へまつるなり。

奉祈すること

必要である。

アチメアチメオオオオオオオオオオオオ

アチメオオオオオ。

アチメアウヲ。

アアヒガテカジンユウアイコ

ウ。

ウトノミヤシロ。

ウトノカミミヤ。

ウトノミヤ。

ウト。

ウ。

ア。

ハ。

ヒ。

フ。

ク。

フルベユラユラトヲフルベ。

ユツツマグシ。

ウ。

ヤシマジヌミ。

イウヲ。

ウ。ウ。ウ。ウ。ト。ウ

ト。ウ。

ウ。

ク。

ヒ。

アチメ。

ヨシ。

ヒフハ。

心して我は行かなん朝夕に

神の心を心とはして。

置く露を掃ひては行け朝毎に

道の長途の長き旅路ぞ。

アアヒガテンジンユウアイコ

ウ。

フハヒフヘホ。

一四七言、リト

と終す

秘徳の説明

状況

→

その意味内容

拝神瞑目して光を認める。

何らかの神命である。

① 座を回りて多数の^{めい}一^しが
あるように見える時は、聖無動尊の加護が顕著
であることを示している。② 高く一^し光の^し大と拝している
ように見える時は(この人の意識が、今までに)
光明世界にあることを教えている。③ 日なる^ヒ一^ヒ閃の^ヒ火が
見える時は、入握剣の作用力が
(今ここに来ていることを示し)④ 全身が^ヒ零の中に座している
ように感じる時は、白玉身(直日)と悟證した
暁であることを示している。おおよく、順序は^低①→②→③→^高④の順でありこの④直日^{ナホヒ}の悟證に至るためのコトワガ、十四字秘言である。

同じ十四字をさらに唱え続けることで、

^{ナホヒ}直日の作用力は^{はたし}全身魂^{ミタマ}に行き渡り、その人は「この身このまま神と化^カる」のである。

ひるがほのはなさくかきねわ
がつまはひなのまろやにともを
こそまで。

大日本祓禊所を移せ。

山裡山外日月清明

一點昭昭不容邪曲

紫の武蔵國原はろはろに

秩父の峰の緑濃く

多摩の河波白玉の立つかと見

れば且消えて

總の入江のしくしくに

玉藻拾はん浦安の眞砂を敷き

て

筑波山そがひに見つつ

今日もかも人こそ遊べ明日も

かも千種百種花を挿頭して。

右は大正人道教主人の歌なり

昭和十三年五月二十三日、緑

雨の中に立ちて蟹公横議の聲を

聞き、急遽之れを草して群生を

警む。

阿。

昭和十三年五月二十五日

水曜日

昨二十四日快晴

一昨二十三日雨

蟹公横議の聲を聞きて長歌一

首を草したる後、不快横臥苦痛

を感ずること甚し。

眞心を盡すばかりぞ。

三十三身如如變化

五十魔境如是出沒

交錯轉變唯一圓

不知踰踰踰踰踰之羈旅

朝暮昼夜坐於壺中。

此の時の此の人の此の心もと

此の火かがやく此の無戸室にし

て。 *ウツム*

之れを *ウツム* の神言靈となす。

ウツム とは無なれば無の字を借り

て *ウツム* と訓ませたるなり。

無戸室 *ウツム* とは *ウツム*

の *ウツム* の義にして戸無き室と

は借字にして、義は無の有なり

との意なれば、火を以つて人に

教へたるなり。

火は無中より発生することを

人人は平生目睹しつつあるが故

に、物の生滅起伏を知らしむる

便宜として仮借すると共に、日

と同じくと呼び、なしたるなり。

然り。

ヒと名づけたるなり。

悉曰日火水零一靈魂〇田等

を皆共にヒと名づけたるなり。

莫露圓。

①とぶとりのあすかのみやはか
みながらかみのとこみやかみし
らすなり。

②人の心いくへに重ねいくへに
かただてやすらんここにかしこ
に。

③之れを日神の神言霊となす。

④□にして日にして二にして一
にして一にあらず二にあらずし
て◎にして◎にして人なり。

⑤人とは十にして田にして田に
して田にして◎にしてヒフミヨ
イムナヤコトにして十種にして
一種にしてヒトなり。

⑥之れを八とも八とも八とも描

きたるは支那民族の伝承したる
ところにして四象にして両儀に
して大極にして小極にして易に
して日月にして極にして墓にし
て佛にして弗にして非にして否
にして靈にして雨巫にして慈
雨にして零にして○にして無に
して無にあらずして有にして有
にあらずして人にして人にあら
ずして印度人はアミダブーと傳
へ来れるなり。

⑦日神の神言霊を称へつつあれ
ば人の身ながら神の身となるべ
きなり。

⑧其の故は神の言霊が人の身を
導きて神界を築かしむるが為
にして人としての神と成らしむ
るなり。

本文は ①-②-③-⑦-⑧

④は③の「日神」の説明文、

⑤は④の末尾の「人」の説明文、

⑥は、その内容のさらに説明文、

ここで言う「ヒト」は「人間身」のことではない。

⑦ 神の身 = ⑧ 人としての神 = ⑤ 「ヒト」



⇐ 日神の神言霊

⑨ 人の身 (人間身)

其の安楽世界と云ふのは弥陀浄土であるところの佛国で基督の天国であるところの樂園である。

日本民族は高天原と称へまつるので、天照坐皇大御神の築きたまひて天照大御神の知ろしめします天照皇大御神の神界である。五代にして七代にして三十五代にして一代であるところの三十六神界である。

つまり善惡を明瞭に判別の付いた世界である。之れを天地初発と教へ来りしところで善は善であり、惡は惡で、美は美で、醜は醜で、正は正、邪は邪であると各人各自が知り得て行ひ得たる曉なので、一圓昭昭一音琅琅の極無極限無限の日にして、火にして一にして非にして否にして緋にして光明晃耀赫灼赫赫たる大宇大宙なのである。大宇宙の大中心としての無宇宙にして無宇宙の無中心である。

無宇宙の無中心であるから極大であつて極小であつて極大極小である。一圓相で一音響だとは示の教へたまふところで人の身としては知り得るところではない。

神言靈は之れを「アメノミオヤアメユヅルヒノアマノサギリクニユヅルヒノクニノサギリノミコト」と教へ給ひ、「アマテラシマシマスアメノミナカヌシノカミ」とも「アマテラシマシマスアメオホミカミアマテラススメオホミカミアマテラスオホミカミ」とも「クニトコタチノミコト」とも「トヲカミエミタメ」とも「アアヒガテンジンユウアイコウ」とも「アチメ」とも「アマミダ」とも「ナムアマミダブウ」とも教へ給へるところである。

地蔵佛界(七)

此のような神言靈を平常不斷に称へて居れば、一圓一音の示界が平常不斷に築成されつつあるのであるから、此の身は小さく狭く限られて居るようではあるが、小さく狭い其のままに広く大きな示界が現れて来るのである。

阿弥陀如来の浄土は西方に在ると云ふ。西又西で際涯無く西へ行くのだと云ふ。際限の無い西と云ふのは西であつて東で、東であつて西で、南であつて北で、北であつて南で、上であつて下で、下であつて上で、中央であつて十方で、十方であつて中央である。

故に西でもなければ東でもない、南でもなければ北でもない中央でもなければ上下でもないところの大宇大宙で、大宇大宙の大中心である。従つて十方世界で十萬億土で東西南北上下中外である。之れを十字架となすので白玉で皇で天皇で日本で神籬で統一魂神である。

「◎の音」が神言靈として作用する論理

アミダーバ (サンスクリット) 無量光明

アン ミン ダム (ヨガ・マントラ) 光明

アミダブウ

ナーム・アミダブウ

ナムアミダブツ

南無阿彌陀佛

妙音天鼓 (アミダブウ)

統一魂 (ミスマルミタマ) と称へる

数理 (二)

未来五号

未来五号

奇身魂 莫金光
其の人其の徳と
完備したる時

父母乃祖乃宗諸有身魂。

發得菩提妙音吉祥。

妙法蓮華經普門品。

衆生若有受諸苦惱一心稱名觀世音即
時觀其音聲即得解脫。ベギナリ

念彼觀音力妙音觀世音 覺者 清淨喜

具一切功德慈眼視衆生 福聚海

故觀世音佛。

父母乃祖乃宗諸有身魂城。

父母乃祖乃宗諸有身魂。

「稱名」とは、「佛体」であり、「妙相」であり、「妙用」であり、「觀世音」という。

「稱名」を一心專念に稱れば、即時に「妙音」となり、「觀世音」となり、この身このまま「觀世音佛」なる「極樂世界」となる。

この身このまま佛の国である極樂世界であると悟る時は、この身このまま極樂淨土である。

もし、人が苦悩あると思つた時は、それは魔界にあるが、一心專念に「稱名」を稱れば、直ちに佛の国である極樂世界となるというところが、これが解脱であり、大死であり、涅槃であり、「一切の有で一切の無」で、「極大にして極小であり、極無極の人」ということになるのである。

大正人道教主人

多田山公秘稿

大正人道教主人とは直日にして、國家にありては國主なり國王なり國君なりにてましますなれば、家庭に於ける戸主なるべく、組合に於ては組合長にして會社にありては社長なり、會長なりにして、世界人類としては釋迦なり、基督なり、天照大御神なり、天帝なりにてましますなり。

其の故は、生死遷流しつつ生死遷流を知らざるが故にして、天命なり、美固止(みここと)なればにして大宇大宙のその相(すがた)なり、その事理なるなり。然れども、人の身は箇體として限られたる世界に生活するが故に、其の身の来由を知らず、往路を辨ぜずして、箇體に執着し、見聞し得る範圍に於て目的標準を定めんとするなり。於此か、所謂、偶像を目標と

せざれば確實感を得難くして、人爲の對照體を求めて初めて安心立命を得たりとなすなり。

佛像佛面の本尊と稱し、神像神體と稱するものと共に、天皇と稱するも亦然るなり。

大正人道教主人とは神直日なり。

而して、靈にして、魂にして三にして、二にして、一にして日にして、月にして、日月にして、四象にして、兩儀にして、大極にして、無極にして、極無極にして、如是なり。

メにして、ヒにして、フにして、ヒメにして、ヒコにして、ハルヒヒメにして、……にして十種にして、三種にして、一二三四五六七八九十百千萬にして零なり。

之れを人天萬類の基準となすなり。

否、基準なりと知るなり。ヒフミヨイムナヤココノタリヤモモチミテリ。アアヒガテンジンユウアイコウ。

十年依然梧下蒙
三日忽然高峯櫻

さくらばなさきのさかりをあまをとめよにさちあれとあさつとめする。

寫經一卷

あちめあちめあちめあちめあちめ。

寫經一卷

朝陽図一幅

ちちははみおやみおやみなとものにさとりとさる。さとりとさればあまねくひとつなり。

あすばかすやぞ。さからかすやぞ。

おおおおおおおおおお。ああひがてんじんゆうあいこ。

今日今時人不来

風塵掩空日光不明

虚名徒毒於世間

三年不鳴鴈難情。

つるのこのそのひとこゑはそらたかくけふほがらかにひびきわたれり。

山の井の笥の垂氷今日解けて
蕨萌えたり陽炎のして。

昭和十二年四月八日 木曜日

昨夜東海漁翁之嬖子来云。

我是第三神界主神之女也。

今日以後願侍於後宮。

紫の縁由たづねて人ぞ寄る今日をば八日と神の治らして。

ああひがてんじんゆうあいこ。

よし。

まさかきはいろうつくしくなつやまのしじにしげればよしとこそあれ。

ああひがてんじんゆうあいこ。

はるひひめはるひひめはるひひめ。

ああひがてんじんゆうあいこ。

あさもよし。きのべのみやとかみのうけひて。かみのうけびて。かみのをしへて。かみしらすまに。

あさまやま。

ひとこそあふげ。

いつもいつも。

ひとこそはみよ。

けふけふと。

あさひはひかり。

ゆふひはてれり。

やまとには。

うづのみたから。

かみのことばの。

さはにこそあれ。

朝もよし城の上の宮と神の受

氣比て神の受氣毘て神の教へて

神知らず遷遷。

昭和十二年四月九日 金曜日

夜来の雨止まず甚寒し 乾風

ひくまののしほくむをみなと

こよにもきみきまさとひくま

の。

あちめおおお。

よしあしのへだてもあらずあ

をみたるひろのせましとよしき

りのなく。

ひふみ。

ひふみよいむなやここのつ

とをよ。

あちめあうを。

よし。

固の支那文字を見よ。

□古にして□□十にして⑤に

して凝固の形象なり。

而して結實なり、結晶なり。

産靈にして産魂にして魂にし

て、結び止めたるなり。

十なる□の蒐集したる□なる

固なると共に、□に宿りたる古

にして、根本魂と外郭身との團

結體を指導したるなり。

之れを見なり子なり孩なりと

なす。

兒は儿なる人の宿るところに

して宮なり。

子はかがりたりたる人なり。

他に依據するものなり。

孩は子女の未自立し得ざるも

のにして、唯其の核在るのみな

りとの義なり。

常陸國に小田と北條との二村

有り。

鎌倉時代より今に至るまで相

聞ぎ相争ふて止まず。

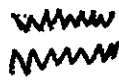
北條の水を小田に分たず。

小田、之れが爲に耕耘にたへ

ず。

仇敵境界を接するを亥と云ふ。

孩の図



之れをハハと云ふ。

母胎に住み母血を吸ひ母乳を

呑み、母を食料として生活せる

もの即、孩なり。

而して母は之れを喜び、之れ

を愛撫し、之れを養育す。

これをマンコと云ふ。

七の妙用なり。

カミヨは七にして五にして八

にして百にして千にして萬にし

て一二三四五六七八九十百千萬

にして零なり。

之れをチチハハと呼び、ミオ

ヤとも、オヤとも称へまつりて

アメツチノカミワなる資料なり

財貨なり。

あちめあちめあちめあちめあ

ちめ。

ああひがてんじんゆうあいこ

う。

大正人道教主人(二)

多田山公秘稿

ミイツとはミツであり、ミモ

ヒであり、ミナノガハであり、

アマノマナキであり、ヨルダン

であり、イソノであり、ソノで

あり、イツカシガモトであり、

アチメであり、アメツチノウケ

ヒであり、アスパカスヤゾであ

り、サカラカスヤゾであり、サ

ワラビであり、サヤサヤであり

サザナミヤである。

ササノクマヒノクマガハニコ

マトメテシバシミツカヘカゲヲ

ダニミンでもある。

之れをヒでメでヒメでウケヒ

で雪の山の解けて流れたる噴泉

なり、泉なり、伊頭能實なりに

にしてミコトなるノリトなれば

ウタなるなり。

伊頭能雄健・伊頭能雄詔・伊

頭能雄走なりとはなすなり。

ミにしてヨにしてヒフにして

フにしてヒフミにしてヒフミヨ

イムナヤコノツトヨヨにして
ナチにしてハハにして産靈にし
て産魂にして魂にして零にして
基準なり。

天命にして命にしてイノチに
してミチにして天地一貫の大道
とはなすなり。

◇

昭和十二年四月十一日

日曜日 快晴 静穏

午後

鈴木東作氏来る。

郷里隣人の歸正立道行により
屋内に在りて太陽を拜し得らる
るに至れる趣を語り、和歌あや
め草を乞ひて歸れり。
あやめぐさあやめづらしきき
みがやどひとこそつどへひとを
こそひてけふけふとあやにめで
つあやめぐさ。

◇

昭和十二年四月十二日

月曜日 曇晴曇

微雨ありしも濡るる程には降
らず。

午前十一時出發、内務省に行
き、高田装束店に獅子圖制作の
仕事を急がしむ。

宮地直一博士獅子圖下書を乞
へるにより使用後に贈ることを
約す。

獅子圖淨書用の金泥一分と羽
簪・膠鍋等を求む。

購入費金參圓四拾貳錢にして
前回分を合すれば五十參圓七拾
錢なり。

此の他に紙幣圓七拾貳錢とす
れば金五十五圓四拾貳錢にして
五十五〇四十二にして、五十五
は天地合体の數、四十二は陰陽
分立の數にして奇妙の靈異數な
り。

〇は基準にして有用の無用に
して、55・42と書けば・は
〇にして、〇以上の55、〇以
下の42なることを示す。

従て之れを別くれば五五・〇
四十二にして、五五は顯數なり
表數なりにして、四二とは裏數
なり幽數なるべし。

故に五十五は地上に在り、四
十二は地下に在るものとも云ひ
得べく、地平線は〇にして、あ
るいは點にして、物無くして物
有るの義なれば、厚みなく幅な
く廣さ無くして長さのみ有るの

線、厚みも幅も長さも無くして
唯位置のみ有るの點、厚みも幅
も長さも位置も無くして唯在り
と知るの面、之は神籬にして磐
境にして天津神籬・天津磐境に
して、劔戟杖矛にして、八握劔
にして、十種神寶にして、三種
神器にして、八咫鏡にして、在
るかぎりにして、無にして、火
にして、最小にして、最大にし
て、ヒにして、ヒカリにして、
ヒトなるなり。

人なるなり。
故に云はく。

天とは直日にして八十直日に
してして大直日にして神人にし
て日止にして火人にして皇玉に
して靈にしてミシルシなり。

人間身にてはましまさぬなり。
さればこそ天皇は神（カミ）
にてましますなり。

直日は神（かみ）にてましま
すなり。

而して直日の人は神たる人な
ればとてカムと稱するなり。

カムなりとは、晃耀赫灼の力、
蒐集收納して脱出することを許
さざるムなる二音合成して「唯

光のみなり」との義なり。
カミは天地團成にして、カム
は人間身にして、光にして、世
の光たるものなれば、カミとカ
ムとの相違は、人間世界にて思
ふが如き通音なり音便なりとし
て、同一視することを許さざる
なり。

加美の代に我は遊べり今日今
日と人を誘ひて我は遊べり。
天地の加美の心を人の子に教
へて行かん人の身ながら。
ああひがてんじんゆうあいこ
う。

昭和十二年四月十三日

火曜日 晴

未明發汗、寝具をしぼるばか
りなり。

其の何の故なるやを知らず。
然り。

其の知らざるはカミにして、
其の知るものの知らずして知れ
るはカムなり。

チチハハミオヤミオヤのノリトの説明

固の支那文字を見よ。

□古にして□□十にして◎にして凝固の形象なり。

而して結實なり、結晶なり。

産靈にして産魂にして魂にし

、結び止めたるなり。

十なる□の蒐集したる□なる

固なると共に、□に宿りたる古

にして、根本魂と外郭身との固

體を指事したるなり。

之れを見なり子なり孩なりと

す。

兒は儿なる人の宿るところに

て言なり。

子はかがまりたる人なり。

他に依據するものなり。

孩は子女の未自立し得ざるも

にして、唯其の核在るのみな

りとの義なり。

常陸國に小田と北條との二村

有り。

鎌倉時代より今に至るまで相

闘ぎ相争ふて止まず。

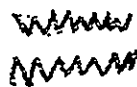
北條の水を小田に分たず。

小田、之れが爲に耕耘にたへ

ず。

仇敵境界を接するを亥と云ふ

孩の図



之れをハハと云ふ。

母胎に住み母血を吸ひ母乳を

呑み、母を食料として生活せる

もの即、孩なり。

而して母は之れを喜び、之れ

を愛撫し、之れを養育す。

これをマンコと云ふ。

七の妙用なり。

カミヨは七にして五にして八にして百にして千にして萬にして一二三四五六七八九十百千萬にして零なり。

之れをチチハハと呼び、ミオヤとも、オヤとも称へまつりてアメツチノカミワなる資料なり財貨なり。

あちめあちめあちめあちめあちめ。

ああひがてんじんゆうあいこ。

ちちははみおやみおやみなと。

もにさとりさとる。さとりさとればあまねくひとつなり。

あすばかすやぞ。さからかすやぞ。

おおおおおおおお。

う。

ヒ
零(一)に内在する原理として、一ニ三があるように、

空零(六)に内在する性質として六七八がある。と考えて良い。

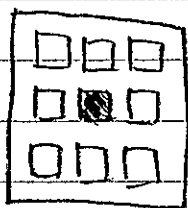
○ヒが二重相としては①であるが故に、

それは①となり「ヒの自己組織化」が可能となる。

同様に、空零もまた状況次第では陰陽不測のメとなる。

母としてのメと子としてのメの離合集散によって、また

固体が成立する。これが w w w w と描く「七の妙用」である。
(九)



(九→十)

九は中心(一)と外部(八)

これを一つにまとめて十とする。

宇

多田山公秘稿

昭和十二年一月五日より此の神命を奉戴して日本民族の信仰を説き示さるべからず。

きくのはないろおもしろくかもたへにすがたうれしときみがたまひし。

ああひがてんじんゆうあいこ

う。

現在の佛教僧侶なり基督教牧師なり神道教師なりが偏固邪曲なればとて、佛教・基督教・神道が偏固邪曲なりと速断するもの多きは、道を知らずして人を見たるのみなれば、其の誤解を

見たること固よりなり。

はるひひめはるひひめはるひ

ひめ。

あちめおお。

ああひがてんじんゆうあいこ

う。

ああひがてんじんゆうあいこ

う。

はるひひめはるひひめはるひひめ。

あちめあちめ。

世人口を開けば佛教は厭世的なり、基督教は進歩主義なり、儒教は現世的なり、神道は民族教なり、回教は現實的なり等と呼ぶ。

果して然るか。

彼等が宗教歴史なるものと現在の教會牧師等の云ふところは或は然らん。又、或は然らざらん。

然れども、それ等は神道の然るが爲にもあらず、佛教の然るにてもあらず、回教・儒教・基督教の然るが爲にてもあらずして、其の教會教師等が各自に然るのみ。

而して、其の教會教師等の然るは、教會教師等が各皆共に神を知らず、佛を知らず、火を知らず、水を知らず、天を知らず、地を知らず、陰を知らず、陽を知らず、人を知らず、物を知らず、神魔を知らず、男女を知ら

ず、雌雄を知らず、高卑を知らず、凹凸を知らず、正邪曲直・美醜善惡を辯ぜざるが爲なるなり。

人間各自天分有り。

正誠正義神國築成。

神國現前佛塔涌出。

水火既濟基督再臨。

天國樂園淨土沃地。

又是正誠此是正義已矣。

權勢財力は正誠正義を蹂躪して平然たり。

可怖權勢門。

可誠財貨家。

オホヒヒルメムチノミコト。

日神の光を見れば七色の輪こそはかかれ神の神輪ぞ。

其の形色等の異なるが如く、人の心も間断無く変化しつつあるなり。

同じ太陽を拜しても人によりて大小の別、色光の差がある。同じ人でも時により其の差別がある。

人の心の、富めるものの天國に入ることは駱駝に乗りて縫針の孔を潜るよりも難しと知れ。天地神魔明闇高卑即是日止也矣。

故云易也。

正邪本来非正邪。

唯是位置又是時季。

觀来唯是正邪也已矣。

以上 昭和十二年三月一日

イシコリドメ。

カガミ。

人の心の変化しつつありと云ふは、身の変化しつつあるによりて其の身の五感的には知り難きが心と名づけられたるものなれば、則然りと推定し得るなりとの意なり。

其の身心の変化を見て、之れに留意せよとの教へよりして神の宮に鏡を備へたるなり。

この意味にては鏡を「カヘリミル」「カンガミル」の義なりと説くことを得るなり。所謂通俗的の説明にして卑近

なる教化に資すべきなり。

正邪曲直を判別せしむるの一端なれば正しきなり。

正しきは正しきなりと雖、神の言としての説明にはあらず。

人間心相應の訓誡或は童蒙教化の方便なりと云はば、則可なり。

兩儀即四象。即現象世界。即本體。

むらさきのゆかりたづねてひとぞよるむさしくにはらゆかりたづねて。

アアヒガテンジンユウアイコウ。

昭和十二年五月二日 日曜日雨なりしも夕日赫灼きたれば参拜者に太陽を拜せしめたり。

或者青光に拜するを常なりと云ひ、或者はは黄光に拜するが常なりと云へり。

或は五色光に拜するものあり。紫色光に拜するものもあり。それ等の人人も各自に其の時にて変化有るなり。

之れ、其の人人の異れるか、

将、太陽の変化するなるか。

太陽の異なるにあらず、人の異なるなり。

人の変するなり。然り。

然れども、太陽も亦、変化しつつあるなり。

其の不変の変を「ヒ」と呼び「ツキ」と呼び「ヒツキ」なりと称ふるなり。

「ヒツキ」とは「カガミ」にして「イシコリドメ」なり。

之れを「アマノイハヤド」と呼びて「アマテラスオホミカミ」の籠り居給ふところなり。

アマノミナカヌシノオホミカミにしてアマテラスオホミカミにしてアマツイハサカにしてヒフミなり。

ヒフミは即ヒト。

ヒトとは日止。

即明闇。即昼夜。即易。即日。

月。即ヒツキ。

ヒは即○。即○。即○。即○。

即●。即□。即□。即令。即田。即田。即田。即十。即一。

即一二三四五六七八九十。即百。

。即千。即萬。即ヒフミヨイムナヤコノタレリヤモモチチミテリなり。

う。う。う。う。う。と。う。

をとめごのくれなるもゆるおもひにはよのうきこともおぼえざらん。

以上 昭和十二年五月三日夜

ヒフミヨイムナヤコノタレリヤモモチチミテリ。

を汝ら人間に止めんと欲して授けたるものなり。